20045

橈骨動脈止血中の生活指導の介入方法を検討～外来・病棟・カテーテル室で連携強化～

【目的】当院で調査を行った先行研究より、穿刺部出血を事前に患者因子やカテーテル検査・治療中の情報からリスク評価が困難であることが分かり、患者教育が必要であることが分かった。そのため、当院は外来、病棟、カテーテル室と連携を図り止血に関する患者教育に取り組んだため報告する。【方法】患者指導に用いるパンフレットを作成し介入。対象患者は 2018 年 11 月から 2019 年 3 月の橈骨動脈アプローチ予定患者 63 例。実施内容は、外来の入院案内を行う際にパンフレットを配布し入院までに読んできてもらうよう説明。入院後病棟スタッフにて、患者に TR バンドを装着しながらパンフレットに沿い止血の際の行動制限について説明。その後カテ前訪問看護師が患者の理解度を確認。必要に応じて付き添いの家族にも説明を行った。さらにカテーテル室退室前にも再度カテーテルスタッフにて指導を行った。【結果】期間中出血した患者は、63 例中 2 人であった。２人の出血時の状況は、A 氏は手技終了時の ACT が 534 秒と延長していたため、TR バンド装着直後から出血していた。B 氏は減圧時に少量の出血を認めた。　【考察】先行研究で課題となった TR バンド装着時の日常生活行動について、関連部署と介入したことで出血した事例はなく患者教育は有効であるといえる。しかし、患者からは「止血が大変と聞くけど、イメージができなくて心配だった」という声が聞かれているため、現在、オリエンテーションの見直しを行っている。